

批評と紹介

M. ザーケリー著

初期イスラム社会におけるササン朝系の軍人 ——アイヤーラーンとフトウワウの起源——

清水 宏祐

9世紀のはじめからイラン東部やバグダードでの活動が記録されるようになる「任侠・無頼の徒」アイヤールについては、その行動、理念、社会的な役割が徐々に解明されつつある。しかし、それ以前の時代に彼らがどのような行動をしていたか、その組織はいつごろ成立したものに源を発しているかについては、今まで見るべき研究はなかったといつてもよい。Cl. カーエンは、その分布が旧ササン朝の領域と重なることを強調し、マフジューブやハーンラリーらのイラン系学者も、アイヤールをササン朝崩壊後も存続したイスラム以前からの組織のメンバーと見ているが、いずれも具体的なことは述べていない。

ここにとりあげるザーケリーの近著は、アイヤールの起源の問題に正面から取り組んで、極めて大胆な意見を展開したものとして注目に値する。

本書の構成は以下の通りである。章の構成からも筆者の意図がくみ取れるので、節の題名まで、あわせて紹介しよう。

はじめに

1. 序章

2. ササン朝後期の社会制度

2.1 ササン朝は「封建国家」であったか

2.2 小規模土地保有者としてのアーザーダーン

2.3 軍事・行政組織

2.4 騎兵と歩兵

2.5 エリート軍人としてのアスバーラーン

2.6 王の「従者」としてのバンダガーン、サルハンガーン、アイヤーラーン

2.7 むすび

3. 初期イスラム社会におけるアーザーダーン

3.1 はじめに

3.2 ムスリムによる征服とディフカーン

3.3 バスラとクーファにおけるアスバーラーン

3.4 シリアにおけるアスバーラーン

3.5 地方行政機構

3.6 イラクにおけるディフカーンとアスバーラーン

3.7 ホラーサーンにおけるアスバーラーン

3.8 貴族たちの子孫としてのアブナー

4. 文学・神学における任侠精神

4.1 アーザードマルディーヤ・シュウーピーヤ、アーザーデギー、フトゥウワ

4.2 カダリーヤとウスワリーヤ

東

洋

この構成からもわかるとおり、彼はササン朝時代、初期イスラム時代を通して、術語を近世ペルシア語の表記で統一している。そのため「アッバース朝時代のバグダードのアイヤーラーン」というような、史料に決して現れ得ない表現に、まず驚かされる。この場合にはアイヤール、またはアイヤールー
ンと表現すべきであるし、ササン朝時代であればハイヤール（これがアイヤー
ルと同一の実態を備えたものかどうかは別にして）とするべきであろう。同
様に、初期イスラム時代のアスバーラーンという表現も訂正すべきである。
またアーザーダーンなるものは、この形では本書が扱うどの時代にも存在し
ないわけで、ザーケリーの描く「理念型」でしかない。この表記法からも、
ササン朝時代の組織と、初期イスラム時代の集団とをかなり強引に結びつけ
ようとするザーケリーの姿勢がうかがえる。

本書を通じてのザーケリーの説を要約すると、次のようになる。

「ササン朝時代の「下級貴族」であるアーザーダーン *azādān* (*asbārān*) の集団がイスラム時代以降も存続した。ウマイヤ朝時代のホラーサーンやアッ
バース朝期のバグダードでは、彼らはアブナー *abnā'* と呼ばれていた。サ
サン朝時代のアイヤール *ayyārān* とは、*azādān* の中の特に君主の近くで
護衛に当たる者たちであった。9世紀バグダードのアイヤールも、アブナー
とは不可分な存在であった」

このようにしてザーケリーは、9世紀のアイヤールをササン朝の軍事集団の系譜を引くものとして説明するわけである。この説の特徴は、従来あいまいに言っていたアイヤールの母体を、ササン朝時代の特定の集団に求めたことにある。また、それが9世紀までアスバーラーン、アブナーと呼ばれて存続し、バグダードのアイヤールに至るとしたことも、まったくの新説である。アスバール（アーサウイラ）がササン朝起源のペルシア系集団であることはすでに言っていたが、これをササン朝期の「アイヤール」と結びつけた点も斬新である。この説の魅力は、なぜ9世紀以前にはアイヤールの語がイスラム史料に登場しない（と考えられていた）かという問題をも、うまく説明することができる点にある。

はたして、この説が妥当なものといえるか。以下本書の中心をなす、第二章と三章で検討してみることにしよう。

第八十卷

一二六

第二章でザーケリーは、以下のように言う。

批評紹介清水
「アヌーシルワーン以前には、大土地所有者が戦時に提供するものがササン朝の軍事力の中心をなしていたが、それ以降は、「下級貴族」のアーザーダーンの地位が上昇してササン朝の内部で要職につき、マルズバーンと marzbānān としては州総督になり、ディフカーン dihqānān（中小土地所有者）としては、地方の行政にたずさわった。都市では、彼らはサルハング sarhangān とよばれ、同様の機能を担った。この軍事（土地所有）貴族の理念は、その戦士としての精神アスバール asbār たることにあった。これらの騎士たちアスバーラーン asbārān は、君主の護衛兵プシュティグバーン pushtigbān、側近サルハング sarhangān、宮廷の従者パフラヴァーン pahlawānān の集団を形成した。宮廷の組織、儀式、警備などの職についた軍人が王のアイヤール（アイヤーラーン）ayyārān と呼ばれた。アスバールは、貴族、特に騎兵について使われた語で、しばしばディフカーンと同義語であった。」(pp.93-94.)。

全体としてザーケリーは、「アーザーダーンのうちの、アスバーラーンの中で、特に君主に付き従う親衛隊がアイヤール（アイヤーラーン）である」というイメージを描いているわけである。

第三章では、アーザーダーンが初期イスラム時代にも存続したとして、次のように言う。アーザーダーン（その子孫たちを意味するアラビア語は、Banū al-ahrār）は、初期イスラム時代にも、バスラ、クーファやシリアではアスバーラーン（アラビア語で aswār, asāwira）として活動した。バスラは、Uswāri, Aswāri といったニスバをもつササン朝の指揮官のもとにペルシア系亡命者の中心となった。彼らはアラブの内部抗争には介入せず「ムスリムの敵」と戦うことによって受け入れられた。（シリア方面では）ジャズィーラの征服に参加したハダーリマは、アスバーラーンの一部のものにあたる、と。

この推論の根拠として、彼は、「Banū al-ahrār とは、Sayf b. Dhi Yazanとともに（イエメンに）来たペルシア人で、この時（4/10世紀）まで彼らは San‘ā では Banū al-ahrār, イエメンでは al-abnā’、クーファでは al-ahāmira, バスラでは al-asāwira, ジャズィーラでは khadārima, シリアでは al-jarājima と呼ばれた」とするイスファハーニーの『歌の書』の注釈（ザーケリーの訳による）を引く (p.98.)。さて、上の引用にも現れるアブナー abnā’ であるが、これについては從来、1. 「Sa‘d b. Zayd Manāt b. Tamīm の子孫」。2. 「ホスロー・ブン・アヌーシルワーン時代にイエメンに移住したペルシア人の子孫」。3. 「アッバース朝のアブナー・アルダウラ、すなわちバグダード移住後のホラーサーニーの第二世代」(K. V. Zettersteen and B. Lewis, “al-ABNĀ” EI²) といわれてきた。

ザーケリーは、このうちの1と2とを同一のものであるとし、さらに2が
東
アッバース朝革命に参加し、この集団の子孫が、のちのバグダードのアブナー
となったものと解釈する。

彼は、バスラとクーファに住んだアスバラーンがタミーム部族の Sa'd
洋
b. Zayd の同盟者になり、その後、彼ら Abnā' Fārs と主たる同盟者である
学
Banū Awfi とがムスリム軍とともにイランに行き、バスラ、ホラーサーン
に住み、更にアッバース朝革命に参加したのであろうと考えている (p.273.)。
報
ホラーサーンの abnā' とは、Banū Tamim の一氏族を構成するものであつ
て、イエメンの abnā' とは関係がないという Bosworth 説 ("ABNĀ"
Encyclopaedia Iranica.) を批判し、イスラム化の過程で abnā' が Banū
Tamim と同盟し、時がたつうちに「氏族」として認められたものであろう
と考えるのである。

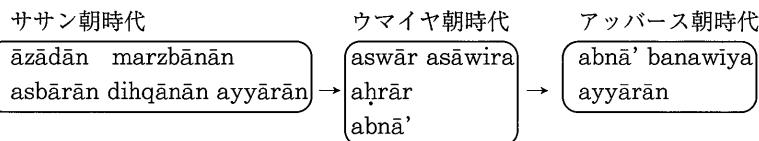
さらにこれらアブナーとバグダードのアイヤールとの関係については次のように説明する。「アッバース朝で、アブナーが最も活発な動きをするのは、アミーンとマームーンの間でおこった内戦においてである。アミーン側の指揮官アリー・ブン・イーサーが195/810年にホラーサーンに向けてバグダードをたたたとき、彼の軍隊の大部分はアブナーが占めていたし、次のアブド・アルラフマーン・アルアブナウイーの軍も2万人の Fursān al-abnā' から成っていた。さらに、この戦いの最中に現れたアイヤールは、人目を引く外見にもかかわらず、その行動は強い規律によって律せられていて、ジャーヒズの説くバナウイー banawī に非常によく似ている。バナウイーは、歩兵であり、市街戦に長けている。これは、アミーン時代の彼らの地位、つまり多くが歩兵であって騎乗せずに戦っていることと一致している。つまり、アイヤーラーンとアブナーとは、実際には、一つの組織の中での軍事集団として、行動したのである。また、ジャーヒズの描写との類似性ゆえに、アブナーとアイヤールの間には「不可分な一致点」があることは、明らかである。その後、アブナーは、少なくとも9世紀末まではアッバース朝の軍隊の中で独立した集団として存続し、その後はトルコ系軍人の台頭によって影響力が低下していった。のちにバナウイーヤ banawiya として知られるものは、アイヤーラーンの一部を形成していたバナウイー banawī の名残の集団であろう」(pp.284-288.)。

以上をまとめれば、ザーケリーの結論は、「アッバース朝軍の一部をなし
たアブナー（バナウイー）は、言い換えればイランにおける独自の社会的軍
事的集団を形成していたアスバラーン、アイヤーラーンの子孫であろう。
彼らは、はじめ反ウマイヤ朝の革命に参加し、次にアッバース朝側の軍隊の二
中で戦った。イエメンでもホラーサーンでもバグダードでも彼らは同じ出自、四

社会的背景、ササン朝時代の騎士としての伝統を受け継いでいたのである」(p.289.)ということになる。

批評と紹介 ここでザーケリー説を図式で示してみる。

清水



まず、この図で示されているササン朝時代の集団について見てみると、アスバーラーン、アーザーダーン、マルズバーナーン、ディフカーナーン、アイヤーラーン、サルハンガーンなどの語で表されるものについて、理念、身分、職、職能などが混同されていて、その区別があいまいであることが指摘されよう。

また、ジャーヒリーヤ時代のイエメンとウマイヤ朝治下のホラーサーン、アッバース朝時代のアブナーを結びつける過程では、賛同し難い「ジャラーズイマ」との同定をはじめ、明らかに多くの問題を含んでいる『歌の書』を主要な根拠とし、そのほかは推論に頼っていることが説得力を弱めているといえる。

次に、本書の最も重要な部分の一つ、ササン朝時代のアイヤーラーンが、貴族階級のなかのエリート軍人による君主の親衛隊である、とする根拠について見てみよう。本書をつぶさに見てみると、これを裏付ける証拠として提示されているのは、パフラヴィー語の『アルダシール王行伝』中に、(h) *adiyārān-i Ardashir* 「アルダシールを助ける者たち」との言い方があることただ一ヵ所であることがわかる(p.84.)。しかも、彼自身も同一箇所で、*yārān-i Kirm* (アルダシールの敵の名)との言い方が併記されていると述べているように、この記述からは、「アイヤール」について「助ける者」という以上の意味を読みることは困難であり、まして『親衛隊』というような特殊な用例と解釈することは不可能である。

ちなみにパフラヴィー語の『デーンカルト』の記述に現れるハイヤール *hdyb-l* (*hayyār*) の語の使われかたを見てみると、「助け」「助ける者」という抽象的な意味で使われている例がほとんどである (*Emētān*, *Aturpāt-i*, *The Wisdom of the Sasanian Sages* (*Dēnkart VI*), ed. and tr. Shaul Shaked, Colorado, 1979.)。ただし、特定の「生業」としての、一種の「下積みの助っ人」を意味している例が一つ、「補助軍」として使われた具体的な集団を意味しているケースが一つ見られるが (305, C61)、これらの例は二 ザーケリーの説く「エリート軍人」としてのアイヤール (ハイヤール) 像から三 らは違いものといえる。

第八十卷

次に、バグダードの攻防戦で活躍したアイヤールとアブナーとの関連についてコメントしよう。ザーケリーは、この集団が騎乗せずに戦っていることから、ジャーヒズが引くところの「バナウイー」との類似性を指摘する。しかし、ジャーヒズのいうバナウイーとは、カリフ・ムータスィム時代の軍隊を構成する五つの要素のうちの一つである「ホラーサーン人」で、「王座への近さにおいてはわれわれにかなう者は誰もいないであろう」とされる存在であった（佐藤次高『マムルーク』東京大学出版会、1991年、49-51頁）。これと「上半身は裸で、ズボンをはき、なつめやしの葉でつくったヘルメットをかぶって葦製の盾をもち、小石と砂で武装して…中略…これらの指揮官が乗る馬は、帯やハエたたきを尻尾にみたてた人馬にすぎなかった」（佐藤次高「バグダードの任侠と無頼」『イスラム社会のヤクザ歴史を生きる任侠と無頼－』第三書館、1994年、68頁。）アイヤールとの類似性（ザーケリーの本意でいえば共通性あるいは同一性）を求めるこには無理がある。

タバリーは、この一連の戦いの中で、ターヒル側についていた、あるホラーサーン人（ホラーサーニー）が遭遇した、アイヤール（「裸の集団（カウム・ウラート）」の人）について、要約すると、次のような話を伝えている。アイヤールは、「タールを塗った筵をもち、石の入った袋を下げ」、矢を射られるたびに、それを拾っては「また1ダーナク（儲かった）」と叫び、ホラーサーニーが矢を射尽くすと、パチンコで石を放って、その目に命中させ、彼をして「あいつらは人間じゃない」と言わしめたと (*Tabarī, Ta’rīkh Rusul wa al-Mulūk*, 10vols. ed. Muhammad Abū al-Fadl Ibrāhīm, al-Qāhira, 1960-66, VII, pp. 457-458.)。この記述からも、群衆とともに参加した、不正規軍としてのアイヤールの姿をうかがうことが出来る。これはザーケリーが一貫して描いている、エリート軍人としてのアイヤール（ササン朝から9世紀のバグダードまで）像とは大きく異なるものである。アミーンとマームーンの抗争によってバグダード包囲がなされた時、アブナーの内部分裂と一部の兵士の逃亡によって弱体化した部隊にかわって、アミーン側に立ってバグダードを防衛したのはアイヤールや種々雑多な集団を含む民衆であったから (*Mas’ūdī, Murūj al-Dhahab*, 4vols. ed. Muhammad Muhi al-Dīn ‘Abd al-Hamid, al-Qāhira, 1963, II, pp. 409-411. *Tabarī*, VIII, pp. 441-444, Kennedy, H. *The Early Abbasid Caliphate*, London and Totowa, 1981, pp. 143-150.)、これをバナウイー（アブナー）ととらえることも、本来無理がある。

本書全体を通じて、ザーケリーがアイヤールを「騎士道精神をもったエリート軍人」として描こうとする姿勢が明らかである。ササン朝は「封建国家で二つあったか」という一節も、「騎士」の存在を立証しようとするための試みの二

一環である。また、各所に一種の「イラン・ナショナリズム」ともいうべき論調があるのも目に付く所である。

批評と紹介清水さて、本書にはイスラム期以降のアイヤールの出現時期についての重要な指摘がある。従来は、集団としてのアイヤールの初出の時期と場所は、196/812年のバグダード、個人としては192/807年のスイースターンとされてきた。しかし、ザーケリーによれば、ペルシア語史料であるガルディーズィー Gardizi の記述に、アラブ軍のマルヴァ進駐に際して、ディフカーンとアイヤールによる反乱が発生し、多くのアイヤールが殺害された事件があったという。彼は、これをアラブ軍とディフカーンの関係を考察する一環として記述しており、さほどの重要性を認識してはいないようで、その事件の年代についても特に述べていない (p. 228.)。アイヤール、あるいはその母体となったものが一貫して存在する立場からすれば、このような姿勢も当然といえるかもしれない。

彼が紹介するガルディーズィーの記述とは、「ウマイル・ブン・アフマル・アルヤシュクリー Umayr b. Ahmar al-Yashkuri のホラーサーンのアミル職」の項にある記録である。その内容は、「彼の軍がマルヴァのディフカーンたちの斡旋によって市内の民家に宿泊したところ、紛争が起き、アイヤールたちとバーザール商人たちが反抗を企てた。町のサーラールでディフカーンであったものがウマイルに通報したため、軍隊による弾圧が行われ、結局町の人々が間に人を立て、金を払うことによって、この件が落着した」というものである (Gardizi, *Zayn al-Akhbār*, ed. 'Abd al-Hayy Jībī, Tehrān, 1347Kh, p. 102.)。ガルディーズィーには年代の記載はないが、これが (31/651年のマルヴァでのスルフ締結にあたるとすれば、本来言われていた時点よりも、150年以上もアイヤール登場の時点は引き上げられることになる。ガルディーズィーの記述はタバリー、バラーズリーとも異なっているが、内容は詳細であって、別の系統の史料を引いていることをうかがわせる。今のところこれ一つでアイヤール出現の時代を論じることは危険であるが、学界に一石を投じる貴重な指摘であることは間違いないところである。本書の価値の一つは、ここにあるといえよう。

本稿では、第4章の「文学・神学における任侠精神」にまで触れる余裕はなくなった。ザーケリーの投じた一石は、意図するところは斬新ではあるが、論述の過程には多くの無理があるように見受けられる。しかし、一部に新しい知見を含んでおり、多く史料を使った意欲的な記述も見られ、この分野の研究においては無視できない存在となっていることも確かであると思われる。

二 (Zakeri, M. *Sāsānid Soldiers in Early Muslim Society: The Origins of 'Ayyārān and Futuwwa*, Harrassowitz, Wiesbaden, 1995. VIII + 391p.)